

色の名前と自然観察

案内人 有元高太
(染色作家 なぞやしき主催)

今回は今までの観察会とはちょっと違う
変わったお話をしたいと思います。

緑

さて最初に植物園にちなみ、「緑」という色を取り上げてみたいと思います。この「緑」という色は飛鳥時代頃から使われてきた色の名前だといわれています。この「緑」という色はよく植物の色に使われますね、しかし、本当は「そにどり」:の羽の色だといわれています。古事記に出てくる大国主命が詠んだ歌の中に「そにどりの青き御衣(みけし)」と詠んだ歌がその色の元だといわれています。「そにどり」だなんて鳥は知らないといわれてしまいそうですね。この歌に詠まれている「そにどり」というのは翡翠(かわせみ)の古名のことです。でも、翡翠(かわせみ)の羽の色って青い色ですね、ではなんでそこから緑という色が生まれたのでしょうか?いろいろとネットや図鑑で調べてみてもきれいな青い色ですね。こうして考えてみると、緑と命名した方はもしかして青と緑の区別がつかなかったのだろうか?なんて思えてくるところですが、このカワセミの生息場所が一つの鍵のようです。カワセミは山の中のせせらぎに飛び込んで餌をあさり飛び交う鳥でその中で保護色であり、獲物に見つからないようにするための色なんです。確かにそのものの色は青かもしれないけれど、その輝くような青は周りの緑の山の中にあると消えていく構造色(こうぞうしょく)と呼ばれる色です。羽の色はその緑の光をきれいに反射して緑の輝くときがあるんです。つまり写真などで見た鳥の色ではなく、自然の中で飛び交うカワセミの羽の色が緑の由来だったんです。今の世の中では、テレビやネット、図鑑のなかの写真などで由来のもとになったもの

を見ることが出来ます。しかし、由来になったその時代にはそんなものはありません。自然の中で生きている光の中で見る実物がその由来なのです。

絳(あか)
—日本での最初の色の名前—

この色は飛鳥時代以前から日本に存在していたと思われる色の一つです。そして、日本での染め色の始まりの色でもありました。日本では一日を4つの色であらわしました。使われた色は「赤」「黒」「白」「青(灰色)」でした。明るいという時間帯が「赤」(明るい語源)、暗い時間帯が「黒」(暗い語源)そしてその狭間の時間帯が「白」(明け方)と「青(灰色)」(夕方)だといわれています。赤は土と火を組み合わせた字なのですが、土の中の火である溶岩を表し大地の力と生命力を表していました。この生命力を表す色を顔料としては丹を使い、染め色としては茜草を使って身につけました。前者の丹というのは「土」という意味と水銀という意味を持っています。朱色の元となる硫化水銀のことなんです。地名で「丹生」と呼ばれる名がついた場所はその硫化水銀の産地なのだから。まさに大地の血の色だったようです。その色を染め色にしたいと思い出てきたのが「茜草」でした。現在使われている漢字の茜は草冠に西と書きますよね。もとは「赤根」と書かれていたようです。赤根というのは赤く染める根だったから赤根だったようです。ではなぜ茜になったのでしょうか。夕日の色は茜色などといいますよね。茜草で染めた色は真っ赤というよりは少し黄色がかった赤でした。その色が夕日の色に似ていたところから茜草の色、茜色となりました。草で染めた夕日の色だったので茜となったといわれています。明るいという言葉も赤が元になっています。赤→明け→明るいとなったといわれています。ここからもご察しのように、植物の名前があつて色の名前がついたというのではなく色の名前があつてそれがもとで植物の名前になった、そういう植物がいくつもあります。

❧ 藍 ❧

藍という植物をご存知でしょうか？
徳島の特産品でタデ科の植物です。さてこの「藍」なのですが、現在では「藍」と一文字ですが最初は「藍草」と書かれました。この「藍」という文字には染料という意味があり、もともとは色を表す言葉ではありませんでした。
藍という色の名前が出てくるのは江戸時代ごろ（安土桃山時代という説もあります）。現在の藍染はちょうどこの頃に完成した（それ以前にもありましたが、完全に今の形に落ち着いたのは安土桃山から江戸にかけてです）のです。
それ以前は？という「縹（花田と表記すること）」（はなだ）と呼ばれていました。露草の花の色というのがその語源です。この色が藍色の標準色となっていきました。飛鳥時代から奈良時代にかけては青色は染めるのが難しく染料としては露草の花を使って染められました。「縹」の語源はこの露草の田というところからきています。しかし、この染料には一つ大きな弱点がありました。とても堅牢度が弱くしっかりと染め付けるのはとても大変だったのです。そんななかで大陸より入ってくる「藍」の青色はとても魅力だったのでしょう。研究に研究を重ねて「タデ藍」の灰汁建てが完成されました。
そして、もともとは染料という意味であった「藍」が色の名前となり植物の名前となっていくのでした。
「藍」にはもう一つのエピソードがあります。その色は「紅」です。「紅」を染めるのは紅花。これはもとは中東辺りが原産の植物です。そんな中東の色はシルクロードを通り中国へと渡り朝鮮半島を通して日本へと入ってきました。前述のように「藍」として入ってきたのです。赤は当時は茜草が主流だったのでとても珍しい色だったわけです。そこで呉より渡ってきた染料の色という意味で「呉藍（くれあい）」と呼ばれるようになりました。この「呉藍」がだんだんと転訛していき「くれない」となったといわれています。その中でも特に赤い色が今で言う「韓紅（からくれない）」です。この紅はもう一つの色を作り出しました。「二藍（ふたあい）」と呼ばれる色です。この色は青い「藍」と赤い「藍」の二つを

掛け合わせることから生まれた色という意味です。藍で染め、紅花で染め重ねることで生まれる紫色なんですよ。

❧ 紫 ❧

紫は飛鳥ごろからある色の名前です。当時は大陸（朝鮮半島）より文化や宗教、そしてさまざまな技術が職人たちとともにやってきました。その中の一つがこの「紫」でした。「紫」の語源は朝鮮半島にあるんです。現在も使われている韓国語の「紫」である「ポラセック」がそれであるといわれています。そして、これを染める植物も「紫草（むらさき）」と呼ばれるようになりました。紫は当時（奈良から平安にかけての王朝文化時代）禁色（きんじき）でした。高貴な色とされるゆえんはそこにあります。高級官僚たちしか身に着けることが許されない色だったんです。そのため、平安時代には別名を「ゆかり色」と呼ばれました。現在あるふりかけで「ゆかり」というのがありますよね、赤紫蘇のふりかけです。あれがそう呼ばれるのもこれに由来しています。「紫」にはいくつかの濃さによるくらいが決まっていた。標準色の「紫」を中心に「黒紫」「濃紫」「薄紫」「半色」となるのですが、読めますでしょうか？紫はある意味特別な色でもあったので、黒紫以外はちょっと変わった読みをします。「濃紫」は「こき」、「薄紫」は「うすき」そして「半色」は「はしたいろ」といいました。この「半色」は女房付の女官たちがつけることがよくあったようです。高松塚古墳の壁画に描かれた女官たちの衣装の色の一つがそれだといわれています。官位で身につける色の濃さが違っていたので、薄い紫色は「聴色（ゆるしいろ）」という別名がついています。この「聴色」から下級官吏も身に着けることが許されていたようです。そこからこの別名がつきました。紅色のところでお話した「二藍」は「聴色」と同格の色で、厳密には下級官吏たちや女房たち、女房付の女官たちもつけることが許される色でした。

色の和名にはちょっと面白い特徴があります。

西洋文化と日本文化の違いをととてもよく表しているなあと思います。

たとえば「桃色」というと桃の花の色、「桜色」というと桜の花の色、それに対して「ハシバミ色」や「胡桃色」は実の色なんです。

基本的、日本は花の色が色の名前に、西洋は実の色が色の名前となっています。

明治になり西洋の影響から実の色の色名が出現するのですが、それ以前は花の色、鳥の色そして人の名前が色の名前になっていきました。

その中でもちょっと変わったものがあるので紹介しましょう。

承和色

この承和というので出てくるのは承和菊を思い出す人が多いのではないのでしょうか。

「かの見ゆる池べに立てる承和の茂みさ枝の色にてこらさ」(拾遺・雑秋)。

承和菊というのは黄菊の別名で、その色を模した色が承和色だと思われるかもしれません。

しかし、本当は承和菊ではなく承和天皇をその名前につけた人の名前の色名なんです。承和菊は承和天皇がとても愛した菊でした。そのときの天皇に少しでもふりむいてほしいという思いをこめて宮中の女房たちが身につけた色だったんです。

花の色であり、人の名前の色でもあるというちょっと変り種の色だったようですね。

気象現象と色の名前

東雲色(しのめいろ)

東雲色(しのめいろ)というのは茜色に対しての明け方の空の色、朝焼けの色のことです。

別名を曙色ともいいます。

この東雲色というのは江戸時代の名前で、茜色が夕焼けの色というのに対して作られた色でした。

茜色と同じくアカネを使って染められる色なのですが、茜色よりは薄く明るい色目になっています。夕方これから暗くなるという時間帯と朝方の明るくなる時間帯を色の濃さやほんの少しの加減であらわしていきました。

曙色と呼ばれるようになったのは明治になってからです。(曙について調べる)

虹色

虹色という七色の虹の色を思う方が多いと思うのですが、そうではありません。虹色というのは平安時代の色の名前で、江戸になり虹染(にじぞめ)と呼ばれるようになった色の名前で、紅花の赤色色素で染めたとても薄い赤色のことで、七色を表してはいません。

この色ほど日本人の観察眼を表している色はないと思われます。

この色を知ろうと思うと、当時の紅花のあつかいを知ることからはじめなければ理解できません。

当時、紅花はとても高価な輸入の染料でした。そのため絹にのみ許された染料でもありました。また、この紅花の赤色色素は染め上げると少し青みを帯びた赤に染まりあがるという特徴がありました。

この特徴は、光沢のある絹に薄く染めたときに顕著に現れます。光の加減で青い跡がふと目に写るさまに、雨上がりの空にのみ現れる虹の美しさと儚さを認めた色なのでしょう。

ほんのちよつとの変化をも見逃さず、そこに自然の営みを見つけるといった感性は日本人独特のものであると思われます。



カワセミ 撮影 嘉田修平



上からアカネ、ベニバナ、ムラサキ 撮影 有元高太